

# 井上文雄研究史・補遺（其ノ四）

鈴木 亮

○

本稿は、徳川時代後期国学者歌人井上文雄（寛政十二年～明治四年）の研究史にして、以下の拙稿の遺漏を補ふとともに、其の誤りを訂したものである。

「井上文雄研究史」（『成蹊人文研究』十三号、平成十七年三月）

「井上文雄研究史（補遺）」（『成蹊國文』四十一号、平成二十年三月）

「井上文雄研究史・補遺（其ノ二）」（『成蹊國文』四十三号、平成二十二年三月）

「井上文雄研究史・補遺（其ノ三）」（『成蹊人文研究』二十八号、令和二年三月）

なほ、前稿迄と同様、百科事典、文学年表の類はこれを割愛した。

## 一、明治期

・文雄逝いて二年。岡本保孝（況斎）は、文雄のものとした仮名遣ひ

に就ての書『仮字一新』（明治二年四月成刊）を批判すべく、『靈語通砭鍼』（明治六年十二月序）を著した。『仮字一新』は、仮名遣ひには一定の法則がないと述べる、上田秋成『靈語通』の主張を継承してゐるところに特色がある。清水浜臣に学んだ保孝は、自らが賀茂真淵の学統を汲んでゐることを可なり意識してをり、「おなし県居の手ふりまなふもの、弟子にして、かゝる師説にそむきたることはいふは、いとくあるましき事なり。」（序文）と、文雄の『仮字一新』批判を展開する。同じく県門江戸派にありながら、真淵の説をよしとしない文雄の言ふところが許せない、といふのである。なほ、この序文には、木村定良門の伊豆の女流歌人木城花野も文雄の説を難じた書を著したと記されてゐる。

・肉筆が伝存する名家の忌日を纏めた、古筆了伴の編にかゝる『思ひよる日』（嘉永元年刊）——古筆了悦（補訂）、古筆了仲（増補）の両名によつて『増補思ひよる日』（明治十一年十二月、赤松徳三）が上梓せられた。文雄の忌日が十一月十七日（明治四年）とあるのだが、十八日が正しい。

・一枚刷『全国古今書画定位鏡』(明治十五年一月、奥山清兵衛)は、「古人」(円表記)、「今人」(金銀表記)の部に分けての書画価格表。

文雄は「金廿五円」。本居宣長金百三十円、加茂真淵金百二十円といふ価格で、「古人書画部」に掲載せられた国学者はこの三名のみ。

『今人書画部』にも僅かに福羽美静(明治四十年歿)、鈴木重嶺(明治三十一年歿)、本居豊額(大正二年歿)の三名を数へるばかりであり、この番附、漢詩人に可なりの重きを置いてをり、半数以上を漢詩人が占める。大窪詩仏が文雄と同額の金二十五円、柏木如亭は金二十円である。刊記に従ひ此処に配置したが、当時の物価を考慮するに、又活字版といふこともあり、明治十五年一月の刊行ではなく、後年の改訂版であらう。

・嵯峨正作編『大日本人名辞書』(明治十九年四月、経済雑誌社)は、「井上文雄は和学者なり通称は元真、歌堂及び調鶴等の号あり(統江戸墓所一覽)」と、簡略な記述にとゞまる。『統江戸墓所一覽』は、源氏樓若紫編。『統墓所一覽』『江戸統墓所一覽』とも。

・「東京十五区内の名所旧跡神社仏刹官省会社学校病院其他古墳古城あらゆる有名なる所」(凡例)を網羅した、相澤朮『東京名所鑑』(明治二十五年九月、東崖堂)には、新島原里、郵便電信局、竹芝浦、鳥森神社、月岬、神楽坂、赤城神社、小石川を詠んだ文雄の歌八首が採られてゐる。集中古人の歌は、蜂屋光世編『江戸名所和歌集』、大久保忠保編『開化新題歌集』、本居豊額編『大八洲歌集』、佐々木弘綱編『千代田歌集』等より採つたと凡例にある。著者相澤

朮は文雄門の歌人である。

・一枚刷『歌俳諧短冊当時通用代価』(明治二十九年六月、秋圃蔵版)は、徳川時代歌人俳人の記した短冊の当時に於る値段を記した<sup>3)</sup>もの。文雄は「五銭」。因みに、賀茂真淵三円五十銭、本居宣長二円五十銭、鳥丸光廣五十銭、本居大平五十銭、小澤蘆庵五十銭、加藤千蔭五十銭、村田春海四十五銭、と続く。荒木田久守、狂歌堂嶋人が文雄と同額の五銭である。

## 二、大正期

・金子薫園「井上文雄の歌」(『歌文新話』大正元年十一月、啓成社)は、『調鶴集』所収の十六首に詳細な鑑賞を施す。薫園の文雄を見る眼差しは実に温かい。

・明治記念会編『明治記念写真帖』(大正三年六月、山陽新報社)には、略伝が掲載せられるも、忌日に誤り(十一月十七日)がある。

・芳賀矢一編『日本人名辞典』(大正三年九月、大倉書店)「文雄」の項は、凡例に「記述は極めて簡明を旨とした」とあるとほり、実に簡潔である。

・『同方会誌』第四十二(大正五年八月)、第四十三(同年十二月)、第四十四(大正六年九月)、第四十五(同年十月)には、『諷歌新聞』が翻刻掲載せられる。「新聞とはいへど今の雑誌体の小冊子」と解題にある。

・大正六年二月十四日、会津は飯盛山なる白虎隊三十一士墓所の奥に会津藩士であつた書家山内昇（香溪）によつて「思ひ出乃記」碑が建立せられた。碑の前面には建碑の由来が誌される。すなはち、香溪が明治元年十月三日、黒田藩兵により逮捕、翌日糺問所に拘禁せられた折、武川（内藤）信臣、広澤安任、覚王院義観、文雄、草野御牧、成川尚義が同所にをり、「皆知己なれば合作して密かに」一幅として香溪に贈つて呉れ、それを「おもひ出の記念」として石面に刻したといふものである。合作の詩歌は裏面に刻まれ、文雄の一首は「長閑なる心のおくの山のうちに命をのぶる余生なりけり」といふものである。文雄の逮捕は十一月十二日ゆゑ、裏面に「明治紀元十月、囚中諸賢為我友山内雅兄書云 得岳又識」とあるには、いさ、か疑問が残る。「得岳」は広澤安任の号。安任は、獄中時を回顧して八首の詩を詠じ『囚中八首衍義』(明治二年成写)と題して纏めてをり、「其六」の詩に「……上野僧義観(覚王院主後安置大河内家以疾卒)亦至。善国雅者井上文雄草野御牧(共以国雅頌我藩故見執真可憫也)等亦同室。於是我命紙筆、聊効雅筵。」と註してゐる。安任、義観、文雄、御牧等で詩歌の会を催したとあるのだが、正確な日付は特定し得ない。なほ、「囚中八首」には「悲惨極まる情景を写し、人をして卒読に忍びざらしむるものがある。」(木下彪『明治詩話』昭和十八年九月、文中堂)といふ評がある。

・「中学校・師範学校並に高等女学校の補助読本」(凡例)たる、小原要逸『近代文鈔』(大正六年六月、啓成社)には、『井上文雄翁家集』(明治十七年四月、小川三艸)より二編の文章「古戰場」「閑居」を収める。『井上文雄翁家集』は『調鶴集』の再版本。

・佐佐木信綱「和歌名所めぐり」(大正八年十一月、博文館)は、恭仁京址、淀川、鳴門海峡を詠んだ文雄の歌三首を掲載する。江戸を詠んだ歌を採つてゐないのが面白い。

・萩野和庵(由之)「学者の伝統と筆迹」(『短冊』三号、大正十年六月)は、師弟の關係で筆蹟が相近似してゆくものがあるといふ論考であるが、岸本由豆流は「春海の風を帯びてゐるに、其門人の井上文雄、文雄門といふ横山由清などは遂にそれてしまつた。」と、文雄の筆蹟が師のそれを受け継ぐことがなかつたと語られる。

・平林鳳二、大西一外『新選俳諧年表』(大正十二年十二月、書画珍本雜誌社)は、「文亀元年より大正十二年に至る四百十三年間に於ける著名の俳人七千余名の伝記、事蹟、著書、其他の事柄を年次的に摘抉略記」(凡例)した労作であるが、歌人文雄も立項せられる。逝いた日を明治四年十一月十七日とするは、『増補思ひよる日』の記事に拠つたか。正しくは十八日。

### 三、昭和期(昭和二十年迄)

・吉野作造編『明治文化全集第十八巻』(昭和三年十二月、日本評論社)には、文雄と門人草野御牧による徳川幕府讚美の歌三十首を収めた『諷歌新聞』が影印で収められ、宮武外骨による解題が附さ

れる(署名は「麿姓外骨」)。なほ、この解題、「すきなみち第一篇」(昭和二年十一月、半狂堂)所収「諷歌新聞」の略述である。

・「師範学校及び高等女学校程度の国語科副読本として編纂」(緒言)せられた、木枝増一編『歴代和歌正選』(昭和五年十一月、修文館)は、文雄の詠五首を収める。出典が『調鶴集』と記されるも、「さえとほる獄ひよこの夜床下冷えて寝られぬものを雪さへぞ降る」(獄中にて)は、「雪ふりける夜」といふ詞書で『調鶴集二編』<sup>5)</sup>に収録せられる歌である。

・正岡子規が、明治三十一年「歌よみに与ふる書」執筆のために写しおいた家集撰集の手控へ『和歌手抄』は、『子規全集第二十二卷』(昭和六年十一月、改造社)に収められてゐる。源俊頼「散木弃歌集」、元政「草山和歌集」、中島広足編『瓊浦集』、泉円「鄙佐びさ辺へ豆理」、加納諸平「柿園詠草」、井上文雄編『摘英和歌集』、原久胤『五十槻搔葉集』、井上文雄『調鶴集』、橘曙覧「志濃夫廻舎歌集」といふ九点を収録するが、子規自筆本『和歌手抄』(国立国会図書館所蔵)には、『田安宗武卿集』も採られてゐる。子規は、文雄の詠を「調鶴集」を見てまた失望す。「曙覧の歌」「日本」明治三十二年三月二十三日)と難ずる一方で、少なからず関心を寄せてはゐたのである。

・藤村作編『日本文学大辞典第一卷』(昭和七年六月、新潮社)「井上文雄」の項は窪田空穂の執筆。通称、号、墓所、著書、歌風と、簡にして要を得た記述である。

・『諷歌新聞』は、明治文化研究会編『幕末明治新聞全集第五卷』(昭和十年二月、大誠堂)に於ては翻刻したものが収録せられるが、翻字が正確でないのが欠点である。解題は宮武外骨(明治文化全集第十八卷)(昭和三年十二月、日本評論社)と同一のもの。

・武田祐吉、水野駒雄『大和物語詳解』(昭和十一年五月、湯川弘文社)冒頭に置かれる「大和物語解説」(水野駒雄執筆)に於ては、「古刊本中の主なるものに就いて略述する」とし、『慶安本大和物語』、北村季吟『大和物語抄』、賀茂真淵『大和物語直解』、『秋成本大和物語』、文雄『冠注大和物語』の五点を紹介する。『冠注大和物語』に就ては、「註釈は適確を旨とし、本文を校合した点などは注目すべき価値がある。」と述べる。なほ、「序」で佐佐木信綱は「自分は曾て東京帝国大学に中世和歌史を講じてをつたをり、歌物語の一として大和物語を考へるに就いて、縣居翁の直解、及び柯堂大人の冠注を参考にし」たと語る。

・片桐顕智は、『明治短歌史論』(昭和十四年十二月、人文書院)「幕末歌壇と明治和歌史」の節で、文雄に就て「桂園派の千篇一律の余弊を攻撃した歌論」「佐佐木弘綱との交渉」といふ二点に注目すべきである」と書いてゐる。

・小泉琴三『近代短歌の性格』(昭和十五年九月、萬理閣)に於ては、「明治短歌史の幕は幕末志士歌集の板行によつて切つて落されたともいへなくはない。且その反面には、井上文雄の諷歌新聞の如きものさへ出でて、その現実的思考——諷歌新聞の場合にあつて

は、新政府への批判と徳川幕府への追慕——のために、明治文学史上最初の筆禍を買ふに到つたりしてゐる。」と『諷歌新聞』が「文学史上に特殊の地位を占むべき」ものであることが述べられてゐる。

・佐佐木信綱『和歌初学』（昭和十六年九月、人文書院）は、和歌に志す人への入門書。「初学の人に」の章に於て、文雄の詠三首が簡単な解説と共に紹介せられる。『調鶴集』より一首、『調鶴集二編』より一首、出典未詳一首といふ内訳である（出典に就て明記はせられてゐない）。

・森敬三によつて「高等学校、大学予科、高等専門諸学校並びに師範学校専攻科、高等女学校専攻科高等科、等の教科書用に編纂」（はしがき）せられた『近世名歌新選・幕末勤皇名歌選』（昭和十六年九月、東京武蔵野書院）は、文雄の詠十四首を掲載する（『調鶴集』より十二首、『調鶴集二編』より一首、出典未詳一首。こちらにも出典に就ての記載はない）。

・藤田徳太郎『古典の歴史』（昭和十六年十一月、モダン日本社）は、「近世和歌史概説」の節で、「自由の歌風を理想とする」文雄を、「縣門派でもなく、桂園派でもなく、自由に表現したいといふ欲求」を持つてゐた歌人であつたと説く。

・佐佐木信綱『江戸派末期の諸歌人』（『鶯』三卷六号、昭和十七年六月、那木の葉会）は、『近世和歌史』（大正十二年一月、博文館）と同内容の記述。

・山本嘉将『香川景樹論』（昭和十七年十二月、育英書院）の「第

八章 景樹と後世歌壇」に於ては、文雄の『摘英集』附言に書かれてゐる「賀茂真淵が歌はうたふものゆえしらべを専ら心すべしといへるはひがごと也。香川景樹が調べは天地のなしのまにまにて、うたひ出る則ちなる物ぞといへるなむよろしかりける」を引き、「景樹歌論の影響が充分に見られると思ふ。」と結論づける。本論考こそ、文雄を「景樹歌論を發展せしめた」歌人と見た嚆矢であらう。

#### 四、昭和期（昭和二十年以降）

・山本文雄『日本新聞史』（昭和二十三年九月、国際出版）には、「明治元年（一八六八年）……閏四月、「諷歌新聞」の井上文雄、大神（草野）御牧の兩人が逮捕」といふ記述があるのだが、文雄、御牧が逮捕せられたのは明治元年十一月十二日のことである。

・黒岩一郎『近世近代秀歌選』（昭和二十八年十一月、武蔵野書院）も「高等学校における国語科副教材、又は大学教養課程の教科書として編纂したものである。」（例言）。文雄は『調鶴集』より八首が採られてゐる。「播磨がた瀬戸のしほ瀬の霧はれて月にちひさき淡路島山」（月前遠島）を引くのは、著者の郷土愛によるものであらう。黒岩一郎は姫路市出身。旧制姫路高等学校教授、神戸大学教授を歴任した。

・丸山季夫『三村翁の詩其他』（『典籍』第九冊、昭和二十八年十一月）↓『国文学史上の人々』昭和五十四年七月、丸山隆）では、『色川

「三中来翰帖」より伊能類則の書翰「井上文雄は浮薄第一の人なり」

語られる。

が引かれる。「何れ全文を御目にかける事とする」とある通り、この『来翰帖』の記事を増補して「幕末国文学界のゴシップ」(『日本歴史』七十一号、昭和二十九年五月)、『国学史上の人々』が成つた。「三村翁の詩其他」末尾には、渡辺刀水書入本『国学者伝記集成』に「文雄の娘」と題する三村竹清の「附記」が残されてゐる、とある。この「附記」は、三村竹清「永阪或斎先生」(『書苑』六卷六号、昭和十七年六月)、『三村竹清集六』(昭和五十九年八月、青裳堂書店)を略述したものである。

・上田秋成の仮名遣書『靈語通』の受容を説いた、江湖山恒明『新・かなづかい論』(昭和三十五年十月、牧書店)「第五章 異流かなづかい」では、「量の点では、井上文雄が『仮名一新』で秋成の主張を祖述したにすぎないという、まことに微々たる勢力であった」と指摘せられる。「異流かなづかい」は、木枝増一『仮名遣研究史』(昭和八年六月、贅精社)の記述(「異流仮名遣」)を踏襲してゐる。

・西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』(昭和三十六年八月、至文堂)「第二章第一節 明治元年の新聞」に於ては、『諷歌新聞』一件が紹介せられる。

・佐佐木幸綱「旧派と新派の交替期」(『短歌』十四卷八号、昭和四十二年八月)では、「明治初期になると……江戸派は、井上文雄の死によって事実上消滅しかかっていた。つまり江戸期にあった「派」の対立はほとんど意味をなさなくなっていたようである。」と

・島田修二『諷歌新聞』以降ジャーナリズムからみた短歌の一〇〇年(『短歌』十四卷九号、昭和四十二年九月)は、『諷歌新聞』を論じた数少ない論考である。島田は言ふ「この歌集は、とにかく「新聞」と名付けられたヴィヴィッドな創作」である、と。そして文雄を「一首一首に批判をこめ、身を賭して作品を世に送っていた抵抗歌人」と評してゐる。

・和歌文学会編『和歌文学講座第二卷 和歌史・歌論史』(昭和四十四年七月、桜楓社)に収録せられる伊藤嘉夫「和歌史 近世」は、文雄に就て「歌に対する一家の見識をもち、桂園派の平弱を攻撃し個性の發揮と用語の自由を唱道した」と評する。同書所収、内野吾郎「歌論史 近世」(内野吾郎『文芸学史の方法—国学史の再検討—』昭和四十九年六月、桜楓社)では、江戸派の末流に木村定良、中島広足、清水浜臣、松平定信、文雄を挙げ、「秀れた歌人」と認めるもの、「歌論上の業績は殆んど見られない。」と歌論に関しては低評価である。

・記紀歌謡から徳川時代までの秀歌千首余を収録する、窪田章一郎、藤平春男、山路平四郎編『和歌鑑賞辞典』(昭和四十五年二月、東京堂出版)は、『調鶴集』より三首を引き鑑賞(藤平春男執筆)を附す。

・和歌文学会編『和歌文学講座第十一卷 秀歌鑑賞Ⅱ』(昭和四十五年五月、桜楓社)も、『調鶴集』より三首を引く。鑑賞文は、池田勉

の執筆による。

・太田青丘「近代短歌史論序説―近代短歌と新体詩(一)」(『潮音』五十六卷十一号、昭和四十五年十一月)↓「短歌と人生」昭和五十四年七月、東京堂出版)では、八田知紀、税所敦子、文雄、岩倉具視、入江為守、高崎正風、阪正臣を「明治の旧派を代表する人々」と記してゐる。文雄は「をとめ子が物はちしたるおもかけに匂ひいでたる八重ざくら哉」(調鶴集・八重桜)の一首が引かれる。

・会津郷土研究会編『会津ふるさと散歩』(昭和五十三年五月、歴史春秋社)には、山内香溪「思ひ出乃記」碑が紹介せられるも、文雄に就て「京の歌人」、「投獄されたのも八月」とその記述に誤りがある。

・日本歴史学会編『明治維新人名辞典』(昭和五十六年九月、吉川弘文館)の文雄の項に於て、「江戸明治初期歌壇の殿将といわれている。」とあるは、佐佐木信綱言ふところの「江戸派の殿将として幕末の歌壇に光を放つた」(『近世和歌史』大正十二年一月、博文館)に拠つたのであらうが、文雄は明治四年に逝いてをり、「明治初期」の殿将とするには、多少無理があらう。参考文献に挙がる「小学小伝」は「古学」の誤り。

・星勝『会津文学碑散歩』(昭和五十六年十二月、会津文化財調査研究会↓増補平成三年一月)にも、山内香溪「思ひ出乃記」碑が紹介せられる。文雄の略伝も記され、「清新な歌風で、後の新派和歌に先行する歌も多い。」との評がある。

・福井貞助編『日本古典文学評論史』(昭和六十年四月、桜楓社)所収「詩歌編2 近世歌論」は井上豊の執筆。文雄の歌学思想を村田春海、小澤蘆庵、香川景樹の影響を受け「諸説が合流してい」と説く。「歌学説は、『摘英集』(安政三年序)や『伊勢の家づと』(三卷、安政五年)元治元年刊)、『道のさきはひ』(文久四年成る)、『老のくり言』(明治二年成る)等に見える。」としてゐるが、「老のくりごと」は家集である。

・浅野三平「上田秋成の国語研究」(『国文目白』二十五号、昭和六十一年二月)↓「近世国学論攷」平成十一年十一月、翰林書房)では、秋成『靈語通』の国語学史上に於る位置を述べてゆく中で、秋成の説を是とする文雄の『仮字一新』『続靈語通』が紹介せられる。「近世国学論攷」が刊行せられた平成十一年の時点では、この二冊所在が不明であつたが、『国学者伝記集成』には記載があるため、文雄が「秋成の『靈語通』を、大変買つていたことは間違いない。」と述べてゐる。

・歌人俳人の短冊(筆蹟)研究には缺くべからざる、中野莊次編『和歌俳諧人名辞書』(昭和六十一年八月、臨川書店)には、文雄短冊の影印を収めた文献が紹介せられる。

・北根豊編『編年複製版日本初期新聞全集13』(昭和六十三年八月、べりかん社)は、『諷歌新聞』を影印で収める。「全丁悉皆、幕府の崩壊を悲哀し、官軍の跋扈に切齒扼腕する断腸の歌で占められてい」と北根は解題で述べる。

## 五、平成期

・藤平春男「久貝正典の歌」(『紅霞』三卷二号、平成二年二月)↓  
 『藤平春男著作集第五卷』平成十五年二月、笠間書院)は、文雄の詠を「かなり繊細な感覚の窺われる作品」と評し、『調鶴集』より「国越えの切通したる作り道卯の花咲けり右に左に」(岡卯花)を引き、「家集『調鶴集』には読むに足る歌がある。」と述べる。

・宮崎十三八「武川信臣―彰義隊の残党ゆえに斬首の刑―」(新人物往来社編『物語悲劇の会津人』平成二年五月、新人物往来社)に於ても飯盛山「思ひ出乃記」碑が紹介せられる。文雄の筆禍に關して、「徳川の濁りそそぎて会津川いさぎよき名ぞ世に流れける」の一首を引き、「会津を褒め讃えた和歌を作った罪で捕まった江戸の歌人井上文雄と草野御牧」と述べるが、『諷歌新聞』への言及はない。

・新潮社辞典編集部編『新潮日本人名辞典』(平成三年三月、新潮社)、「井上文雄」の項あり。

・中野三敏『江戸文化評判記』(平成四年十月、中央公論社)「老境の詠」の節に於ては、文雄の家集『老のくりごと』が紹介せられる。元治元年刊本より「よきことをめでたき事をみれば先なみだぐむまで老にけるかな」等四首を引き、「せめてこのくらの自己客観化ができれば、老人問題もそれほど騒ぐこともなからうに。」と述べる。『老のくりごと』明治二年刊本に就ては言及がない。

・山崎勝昭「せちに思ふ心―萩原広道の歌論―」(『日本文学』四十一号、平成四年十二月)は、広道の歌論「さよしぐれ」と文雄の歌論『伊勢の家づと』とを比較しつゝ、両者の恋歌を検討した論考である。広道の恋歌を「艶であつたり(例えば、後朝)、ロマンティックであつたり(例えば、待久恋、初恋、不逢恋)」で、恋の風情は巧みに表現されている。」と評価する一方、文雄の恋の歌は「(駄)洒落使用」が、「随所に見られる。」と捉へ、広道の「さよしぐれ」が「バ恋ノ哥のだいなど取りあてたる時には、大かた上ノ句ハあだし物の事もていひくだして、さて下ノ句に、いさ、かかいなでの恋ノ心をほのめかしおく類おほし」といふ批判がまさに文雄に当て嵌まつてゐると説く。しかし、当時の人々は、文雄の「その洒落て機転の利いた作品を、「気概」あり「才」あふれたものとして好ましく迎えたのではないかと思う。」と言ふ。そして、文雄の「萩原何がしが、さよしぐれ、といへる書にいへらく、歌に雅情と俗情とのけじめあり、といへるハ俳言なり。」と書き起こす「さよしぐれ」批判の言(『伊勢の家づと』)――、歌は「人々生れつきたる性情を、ありのまゝに、いひ出る」ものであり、広道の理想とする歌は、「古人の口真似する作り物」に過ぎないと喝破する、この姿勢を山崎は、大隈言道の「吾は天保の民なり、古人にはあらず。」「(ひとりごち)などの言葉と「共通するところが多い。」と述べる(文雄の歌に就ても「言道の歌と似通っているのが多い。」と指摘してゐる)。また、文雄の主張する「気概ある哥」に着目し、其処から橘曙覧の



「圍炉裡譚」の言説をも想起してゐる。

・朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』（平成六年十一月、朝日新聞社）の「井上文雄」の項目は、久保田啓一の執筆。「草野御牧、佐佐木弘綱、横山由清ら有力な門人に恵まれて没後も名声は高かった。」の評あり。

・加藤楸邨、大谷篤藏、井本農一監修『俳文学大辞典』（平成七年十月、角川書店）に於て、惟草編『俳諸人名録二編』（弘化三年跋刊）の序文、水壺編『俳林良材集夏之部上』（安政六年序刊）の序文を多賀神社宮司の俳人文雄がものしたとしてゐる（『俳諸人名録』本間正幸執筆、「俳林良材集」本間正幸執筆）が、それぞれ「歌堂老人」「柯堂のあるじ」と署名してゐることから、正しくは井上文雄のことである。俳人文雄は、明和八年（一七七二）頃歿。青山氏。・中澤伸弘「近世末期江戸派和歌傍證―鋤柄助之編『現存百人一首』翻刻と研究―」（『東京都立上野高等学校紀要』二十四集、平成八年三月）は、安政年間江戸に在住してゐた歌人の詠を蒐めた「現存百人一首」（安政七年序刊）を紹介する。出詠歌人は「村田春海、清水浜臣、高田与清など江戸派の代表歌人を師とする人物で綴られてゐる」。巻末に「江戸派短冊集影」として、柿之舎文庫所蔵にかゝる小林歌城「夕山」、加藤千浪「歌」、片岡寛光「月前饒別」、間宮永好「除夜」、伊東祐命「尋梅」、文雄「月前梅 世の常の朧月夜をいたつらのはるにはなさぬ梅の香そする」といふ六葉の短冊を影印で掲げる。この文雄短冊は中澤伸弘、宮崎和廣、鈴木亮編『近世和

歌研究書要集』（平成十七年十一月、クレス出版）内容見本の表紙をも飾つてゐる。

・雨海博洋、神作光一、中田武司編『歌語り・歌物語事典』（平成九年二月、勉誠社）所収、高桑佳典子執筆「大和物語 注釈書古注釈」に於ては、文雄の大和物語の註釈書『冠註大和物語』の概略が紹介せられる。

・全国各地の文学碑を網羅した、宮澤康造、本城靖編『全国文学碑総覧』（平成十年五月、日外アソシエーツ）↓新訂増補平成十八年十二月）には、文雄の文学碑として「思ひ出乃記」碑の所在が掲載せられる。

・上田正昭、西澤潤一、平山郁夫、三浦朱門監修『日本人名大辞典』（平成十三年十二月、講談社）、「井上文雄」の項に於ては、「酔ひにたる舎人が顔の衣くばりいづれの殿の使なるらむ」（調鶴集・都歳暮）が引用せられる。

・日外アソシエーツ編『和歌・俳諧史人名事典』（平成十五年一月、日外アソシエーツ）、「井上文雄」の項あり。

・佐佐木信綱記念館編『近世鈴鹿の文人たち 佐々木弘綱と磯部長恒の交流を中心に』（平成十八年十一月、鈴鹿市教育委員会）は、平成十八年度佐佐木信綱記念館特別展の図録である。弘綱、長恒ともに文雄に学んでゐるがゆゑ、文雄の資料が二点紹介せられる（略伝もあり）。長恒が「五先生」と称し敬仰してゐた文雄、足代弘訓、沖安海、黒澤翁滴、萩原広道五人の短冊を自ら軸装したもの、そし

て、長恒校訂による『調鶴集』(安政五年成写)である。<sup>10)</sup>「このほか、長恒宛文雄書簡十八通も残っており、両者の親しい交わりがうかがえる。」といふ記述で以て文雄の項は結ばれる。<sup>11)</sup>

・吉村春峰編纂による土佐国の一大叢書『土佐国群書類従』『同拾遺』に就ては、高知県立図書館が、平成十年十二月から令和二年三月に至る二十年余りの歳月をかけて、その全冊(正編十三巻、拾遺七巻)を翻刻、刊行したことは特筆に値しよう。『土佐国群書類従第九巻』(平成十九年二月、高知県立図書館)には、杉本清蔭が判者をつとめた歌合に文雄、大橋長広が判を加筆した『杉本清蔭年賀十八番歌合』(嘉永元年成写)が収録せられる(竹本義明の簡略な解題を附す)。杉本清蔭(天明八年〜慶応三年)は鹿持雅澄、本居内遠門の国学者歌人。

・中澤伸弘「江戸の「江戸派歌人」の認識の一端―長瀬文豊「雁のはしら」をめぐるつて」(『皇學館論叢』四十三巻二号、平成二十二年四月)は、陸奥白河の国学者長瀬文豊(明治十三年歿、享年未詳)の編んだ『雁のはしら』(静嘉堂文庫蔵)より、白河に歌壇が存在してゐたことを明らかにし、当時に於ける江戸歌人の江戸派に対する認識を説いてゐる。『雁のはしら』は「徳川時代中期以降の歌人の短冊をその筆跡の儘に模刻した短冊帖」である。序文は文雄が記してをり、其処から文雄と地方歌人との交流も語られる。収録歌人の多くは、文雄を中心とした江戸派の血脈に連なる人びとが占めてゐる。序文の翻刻に六箇所不審があつたため、全文を記しておく。<sup>12)</sup>

古曾部の入道の秋風そふくとよまれけむ白川の関のわたりちかう玉出しまの御神いは、れ給へりかの里人長瀬文豊此道のすきものにて世に名高き人々の言の葉はさら也やことなき御わたりのをさへ広く乞出て此宮居にさ、けむとするに同しくは板に物して此わたり行かふ人々にも贈りて昔しのふるくさはひにもせまほしされとやこと無き御方々のは其憚なきにあらねはそは御神にのみ奉りて唯わかちの言の葉をのみかう桜木には匂はしつる也けり古への跡を尊ふる心はへかの竹田の何かしかたくひにこそ

嘉永六とせ葉月十六夜 井上文雄

なほ、『雁のはしら』には『長柄のはしら』(森繁夫編、中野莊次補訂『名家伝記資料集成』(昭和五十九年二月、思文閣出版))、『関屋のはしら』(熊谷武至「大和柿本社奉納歌集」『続々歌集解題餘談』(平成元年七月、水薺名古屋支社)といふ異称がある。<sup>13)</sup>

・安岡昭男編『幕末維新大人名事典上巻』(平成二十二年五月、新人物往来社)の「井上文雄」の項目は、吉野敏が執筆してゐる。『明治維新人名辞典』の記述「江戸明治初期歌壇の殿将」を参看したのであらう、「歌壇の殿将といわれた。」とあるが、「殿将」は、しんがりの意。<sup>14)</sup> 殿下、大将といふ意味ではない。誤解を招き得る表現である。

・田中康二「幕末の江戸歌壇―一枚刷『東都歌仙窓の枝折』をめぐるつて―」(『國語と國文學』八十八巻五号、平成二十三年五月)は、

『東都歌仙窓の枝折』（嘉永三年刊）に収録せられる、井上文雄を含む三十三人を「幕末のリアルタイムに江戸で活躍した歌人」と捉へ、「千蔭や春海が没した後も、江戸では江戸派の歌人が活躍していたのである。」と説く。其の中でも、仲田顕忠、小林歌城、天野政徳、久松祐之の四人を同時代の代表歌人であると言及してゐる。

・鈴木健一、鈴木宏子編『和歌史を学ぶ人のために』（平成二十三年八月、世界思想社）の第二部「七、和歌から短歌へ―明治時代初期」は下田祐介の執筆。文雄、加藤千浪、伊東祐命、小出繁を明治初期江戸派の代表歌人と捉へてゐる。「叙景歌に長けた文雄の代表作」として、『調鶴集』より「墨田川中州を越ゆる汐先に霞流れて春雨の降る」（河春雨）が引かれ、「後の正岡子規の写實的短歌にも通じる趣がある。」との寸評が加へられる。

・盛田帝子「近世雅文壇の研究」（平成二十五年十月、汲古書院）「第八章 安永天明期江戸雅文壇と「角田川扇合」（初出、『雅俗』四号、平成九年一月）は、注に、田代一葉によつて井上文雄歌判、寺山吾鬢扇判「菅家影前扇合」が行はれてゐることが報告（平成二十二年度日本近世文学会春季大会）せられ、「清水浜臣主催泊泊舎扇合一扇と歌の傾向について」（『文学』十三卷三号、平成二十四年五月）として活字化、と記すもの、田代論文に『菅家影前扇合』に関する記述はない。

・清水宥聖編『初瀬和歌集』（平成二十六年三月、青史出版）は、記紀萬葉から現代に至る、初瀬と大和長谷寺に関はる和歌千八百余

首を収載する。文雄は『調鶴集』より五百採られてゐる。

・東洋文庫日本研究班編『岩崎文庫貴重書誌解題Ⅹ』（平成三十一年三月、東洋文庫）には、松平斉民旧蔵『冠注大和物語』（板本）の書誌解題が収められる。

## 六、令和期

・鈴木亮「贈る言葉―揖斐高先生―」（『書物のはなし』令和元年九月、私家版）では、筆者が井上文雄研究に取り組むに至つた端緒を語つてゐる。平成二十七年三月七日に行はれた「揖斐高先生を送る会」（於成蹊大学）の挨拶を活字化したものである。

・徳川時代和歌文学に就ての概観を示した、鈴木健一「近世文学史覚書―和歌篇」（『学習院大学文学部研究年報』六十七輯、令和三年三月）では「十九世紀前半」の節に於て、文雄が採り上げられる。「ほろほると胡桃こぼるる秋雨のふるき垣根に山雀の鳴く」（調鶴集・秋雨）の一首が引かれ、「現実的な日常生活を描写したものであろう。」との評が加へられてゐる。

・鈴木亮「井上文雄の短冊署名」（『成蹊國文』五十四号、令和三年三月）は、文雄の短冊署名の仕方が六度変遷してゐることを、架蔵資料をもとに考察する。文雄の若書きは線の細いものであつた。齢を重ねるごとに、力強い筆蹟となつてくる。文雄短冊八枚、同名の国学者大藪文雄短冊一枚の影印あり。なほ、附記に信濃の国学者岡

七、「井上文雄研究史」正誤

村菊叟（忠香）の歌集『千曳乃巖』（慶応三年成写、早稲田大学図書館所蔵）序文の記述（「おのれ八月の望に生れ」）より、文雄の生誕の日が「八月十五日」であると紹介（中澤伸弘敬示）せられる。

・墨田区教育委員会編『隅田川神社の文化財 矢掛弓雄の世界Ⅲ』（令和三年三月、墨田区教育委員会）は、隅田川神社所蔵にかゝる「隅田川神社奉納短冊」の影印及び翻刻等を紹介する。「社頭月」と題する文雄の一首「みくまりの神のいかきの月影は水色にこそ澄わたりけれ」も収録せられるのだが、作者「文（花押）」と、伝未詳の扱ひである。

・石水博物館には、文雄書翰三十四通（伊勢津の豪商にして歌人川喜田政明（石水）宛三十三通、渡辺林庵宛一通）が所蔵せられてをり、政明宛書翰のほか全文が中澤伸弘「川喜田政明と井上文雄―石水博物館蔵政明宛文雄書翰を読む―」（『皇學館論叢』五十四巻一号、令和三年四月）に翻刻紹介せられる。政明が仲立ちをして、佐々木弘綱が文雄に入門したのではないかと述べ、地方の豪商の援助があり、文雄の著作が刊行せられたと結論づける。

・吉良史明「諏訪社大宮司青木永章のこと―近世後期長崎の雅会の牽引者―」（『西日本国語国文学』八号、令和三年八月）では、青木永章の旅日記『後東路記』（松浦史料博物館所蔵）を中心に、永章の交遊が描かれる。江戸に於ては文雄、本間游清、海野遊翁等と歌会を開いたことが紹介せられる。

最後に、拙稿「井上文雄研究史」の訂正すべき箇所を記して、本稿を了へることにする。

「井上文雄研究史」

・佐佐木信綱『近世和歌史』（大正十二年一月、博文館）「渡邊清は、文雄の娘清可であらうか。」↓渡邊清は、尾張藩絵師（安永七年）文久元年）である。

・宮武外骨「すきなみち第一篇」（昭和二年十月、半狂堂）↓昭和二年十一月の刊行。

・平凡社編『新撰大人名辞典』（昭和十二年五月、平凡社）「山崎村鹿の執筆」↓山崎麓の執筆。『新撰大人名辞典』は、『日本人名大事典』（昭和五十四年七月、平凡社）として改題覆刻せられる。

「井上文雄研究史（補遺）」

・『現代短歌全集第一巻』（昭和六年四月、改造社）「〔調鶴集〕続編（二編）」の所在が不明」↓天理大学附属天理図書館所蔵。

「井上文雄研究史・補遺（其ノ三）」

・井上通泰「南天荘所蔵品絵葉書 第三輯」「三三三」↓目次は「三三三」、絵葉書には「卅三」。大正九年十二月刊。『南天荘絵葉書解説 一二』の文章を『南天荘蔵幅写真真帖』（大正十年十二月、日本巧藝社）の記述とほぼ同内容である旨記したが、正しくは『南天荘墨宝解説』（昭和五年二月、春陽堂）所収「井上文雄短冊」の解

説記事。

これ以外にも多くの誤謬があらうと思はれる。読者諸賢の御教示を冀ふ次第である。

【註】

(1) 東京大学文学部国語研究室所蔵。中村幸彦ほか編『上田秋成全集第六卷』（平成三年八月、中央公論社）に翻刻あり。早川純三郎編『上田秋成全集第二』（大正七年二月、国書刊行会）所収『靈語通砭鍼』は、国立国会図書館所蔵本（『況齋叢書』）を底本としてゐる。

(2) 欄外には「明治十四年十二月廿七日出版」、中央に「明治十五年一月改出版」とある（架蔵）。「明治十六年一月改出版」（瀨木慎一『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成』〈平成十二年四月、里文出版〉所収）、「明治三十年三月」（神奈川県立近代美術館〈青木文庫〉所蔵）と改版も行はれてゐた。「明治十六年」版には「歌書 慶応 金廿五円 井上文雄」の記述あり。「明治三十年」版には、文雄は掲載せられず。

(3) 一部分が「歌俳諸正筆落款價表」と題して「短冊」（昭和七号、昭和三年十月）昭和九号、昭和四年九月）に掲載せられる。

(4) 写本、一冊。香川大学図書館（神原文庫）所蔵。引用は、国

文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」(<http://base.lnjl.ac.jp/~kindai/>)に拠る。池内儀八「会津史卷十」（明治三十年七月、池内清治郎）に安任遺稿「囚中八首加註」として翻刻あり（神原文庫本と若干の異同が存する）。

(5) 写本、一冊。天理大学附属天理図書館所蔵。『現代短歌全集第一巻』（昭和六年四月、改造社）に「調鶴集統編」として一部収録。

(6) 柴田宵曲は、『子規居士』（昭和十七年三月、三省堂）『柴田宵曲文集第三巻』平成四年四月、小澤書店）に於て、「居士が俊頼、文雄に就て云ふところは漫然たる罵倒ではなかつた。「散木奇歌集」にしる、「調鶴集」にしる、居士は皆精読の上、手抄を作つてゐる。自己の敬意を払はぬ作家の者に対しても、この種の労を敢てすることは、「俳句分類」や「俳家全集」が蒼虬、梅室等の作品を逸して居らぬのと一般である。」と書いてゐる。

(7) 引用は『香川景樹論』。板本には「賀茂の真淵か歌はうたふものゆゑにしらへを専ら心すへしといへるはひかこと也香川景樹か調へは天地のなしのまに／＼にてうたひ出る則なる物そといへるなむよろしかりける」（傍線筆者）。

(8) 『仮字一新』は、東京大学文学部国語研究室に所蔵が確認出来る。

(9) 引用は「武川信臣―彰義隊の残党ゆゑに斬首の刑―」。『諷歌

新聞』には「徳川のにごりそ、くと会津川いさぎよき名を世に流しけり」(傍線筆者)。

- (10) 『安政辰巳二とせの歌集也。石薬師佐々木弘綱ぬしよりかり得て、某にあとらへてうつさせつ。長恒(花押)』といふ奥書を持つてをり、表紙に「安政三辰年同四巳年」と書かれてゐる天理大学附属天理図書館所蔵『調鶴集』(文久元年序写)と同内容の書であらう。拙稿「井上文雄著述目録稿」(『成蹊論文』四十八号、平成二十七年三月)には天理本のみ記載。

- (11) 「長恒宛文雄書簡十八通」は、三重県鈴鹿市文化振興部(三重県立図書館寄託資料)所蔵。中澤伸弘「徳川時代後期歌人の交流―井上文雄と磯部長恒との一考察―」(『澁谷近世』十九号、平成二十五年三月)に紹介せられる。

- (12) 神本國臣「短冊余談」(『短冊』昭和九号、昭和四年九月)に於ては、書名こそ記してゐないが、「雁のはしら」を紹介してゐる。此処でも序文の翻字に十三箇所誤りがある。

- (13) 引用は、『模コロ久』第五(令和三年一月、日本書房)所収の写真版(仮題「関屋のはしら」)に拠つた。

- (14) 小林強「架蔵短冊資料点描」(大取一馬編『中世の文学と学問』平成十七年十一月、龍谷大学仏教文化研究所)。大阪市立大学学術情報総合センター森文庫所蔵にかゝる「長柄のはしら」は森繁夫自身による「後補の書き題簽」ゆゑ、「関屋のはしら」を書名として採用すべきであると述べてゐる。同時代

資料として、小津桂窓書翰(安政四年二月二十九日、川喜田遠里宛)に、「『関屋はしら』ト申もの存不申、拝借願申候。」(菱岡靈司、高倉一紀、浦野綾子編『石水博物館所蔵小津桂窓書簡集』令和三年二月、和泉書院)とあることから、『関屋のはしら』を書名とするのが適当であらう。

- (15) 「殿将」の用例として、たとへば「文学史的に見れば、紅葉山人などは、明治文学の代表者と云ふよりも、徳川時代文学の殿将ですね。」(菊池寛『真珠夫人後編』大正十年一月、新潮社)がある。

- (16) 青山英正「伊勢商人の文化的ネットワークの研究―石水博物館所蔵書簡資料をもとに―」(令和二年三月、科学研究費補助金研究成果報告書)

〔附記〕

斎藤茂吉「愛国歌小観」(『日本評論』十七卷五号、昭和十七年五月)↓斎藤茂吉全集第十四卷「昭和五十年七月、岩波書店」には、佐久間象山が文雄に和歌を学んだことが述べられてゐる。土屋正晴「信州松代藩佐久間象山の和歌について―歌風の特徴と和歌観の考察―」(『東洋研究』四十九号、昭和五十三年三月)も亦、賀茂真淵↓村田春海↓岸本由豆流↓文雄↓象山といふ師承関係を解説する。門人に就ての論考は、「井上文雄研究史」に収録してはゐない

が、其の典拠が気になるところである。『名家伝記資料集成』『和学者総覧』は、象山の師として岸本由豆流門の歌人加藤千浪（文化七年～明治十年）を挙げる。清水義壽『信濃英傑佐久間象山大志伝』（明治十五年七月、市川量造）が、千浪門であることを明記した最初の文献であらう。

本年（令和三年）は、井上文雄歿後百五十年の記念すべき年にあたる。

本稿をなすに当たり、青山英正氏、吉良史明氏、鈴木健一氏、田中康二氏、中澤伸弘氏より御教示を頂いた。記して感謝申し上げます。次第である。

（すずき・りょう 東京都立江北高等学校教諭）